

第1回



アメリカITまわりの話題

コラム

リサーチャーたちの金銭観

NTT MCL/NTTコミュニケーションズ

慶應義塾大学SFC研究所

宮川 晋 *miyakawa@nttmcl.com*

シリコンバレーに勤務する筆者のもとに和田英一先生から原稿のご依頼をいただき、非才ながらお受けすることにしました。今後3カ月に一度、というペースにて、アメリカITまわりの話題、ということで少しでも面白いお話をいくつかしていければ、と思っています。

最初ですので、自己紹介からはじめさせていただきます。本稿を執筆している筆者は、2002年3月現在、NTTコミュニケーションズに所属し、NTT Multimedia Communications Laboratoriesというカリフォルニアのパロアルト市にある研究子会社に勤務しています。主にIPv6に関する標準化作業への参画、ベンダなどとのリエゾン、技術開発などを担当しているほか、シリコンバレー付近においてIPv6ネットワークの運用も担当しているチームを率いています。さて、連載の最初の話題としては何が面白いのかと、依頼をいただいてから考えつづけ。正直に言って、アメリカ事情など「情報処理」誌の読者はみなリアルタイムでご存知の方も多だろうと考えあぐねる毎日でしたが…ここは衰えたりとはいえベンチャー渦巻くシリコンバレーらしく、最初はアメリカでITの研究に従事する人たちのお金に対する価値観はどのようなものなのだろう、という話題からはじめたいと思います。

筆者の友人であるCisco社のSteve Deering博士(IETF IPv6 Working Group Co-Chair, IPマルチキャストの発明者としても名高い)とは、毎週、日曜日に一緒にハイキングをしています。口を開けば「僕の目的はインターネットを広めることで電話会社を撲滅することだったはずなのだが、最近IPv6が君たちのような電話会社によって推進されているのは随分皮肉なことだ」などと面白おかしくいう彼は、決してお金を儲けることが人生の究極の目的ではありません。Cisco社の利害と研究者

としての彼の理想はけっして一致しているわけではないので、議論していて「そりゃ研究者としては分かるけど、ジャパニーズサラリーマンとしては納得できないよ」といわざるを得ないようなこともある、一種の理想主義者です。ですが、そんな彼も勤務しているCiscoの株価には一喜一憂。ストックオプションがありますからね。財テクの苦手な私に対し「君、全然、株とか持ってないのか?」(はい、持ってません)と驚かれたこともあります。社会保障に関する信頼は日本でも揺らぎつつあるようですが、そんなものへの信頼などなくなってきているアメリカでは、投資をすることは普通の人間として必要な行為でもあり、このあたりがやはり標準的なのかな、と思わされます。

一方、日本ではあまり聞くことのできない意見をはっきりと聞くことができたのは今年のお正月。日本からある偉い方がサンフランシスコをご訪問になりました。目的は、日本のある地方に産業振興の核となる新設の研究機関を作りたいということで、当地の有力大学の関係者のお話を聞きたいとのこと。筆者たちのリサーチアドバイザーでもあるバークレー校、EECS (Electrical Engineering Computer Science)の学科主任、Randy Katz教授をご紹介することにし、私どもがお付きについて会合が持たれました。世界に誇れるセンターオブエクセレンスをめざし、研究費や研究設備などけっして不自由させない、というお話に対して、Katz先生から意外なコメントが。

「バークレーやスタンフォードが成功した理由はいろいろとありますが、なかでも大事なものは、教員という地位に対して、十分な社会的な尊敬と金銭的な報酬があり、そして、質の高い生活が送れる場所に大学がある、ということがあげられます。それでこそ、優秀な

人間が、競争が厳しくともそういう地位を目指すのです」という趣旨のことをはっきりと仰られたのです。

全米で「住んでみたい場所」のランキング上位に必ず入るサンフランシスコという街、カリフォルニアワインの産地として世界的にも名高いナパ・バレーまで程近く、また、世界的に有名なペブルビーチ・ゴルフコースをまじかに持ち、全米でも屈指のリゾートとして知られるカーメルもすぐ。世界に名立たるレストランも散在。それ以外にもさまざまに生活を楽しんでくれるものがある場所、そして、からっとした気候で一年中寒くなくも暑くもない場所に「シリコンバレー」ができたのは偶然ではない、というわけです。

同席していた私は一種のショックを受けましたが、考えてみればもっともなこと。もし研究者や教員の間で何の競争もなければそれはただの甘えなのかもしれませんが、優秀な成果がでてなければ地位を失う、という激しい競争があるならば、研究費や研究設備も当然なことながら、その地位についている人間に対しての、十分な金銭的報酬と、それを使う機会をあたえるべき(給料が高くてそれが使えないのでは意味がない)であるというこの主張、日本で主張したら「なんて下品だ」などいわれかねません。また、アメリカにだってまわりに何もなくても優秀な大学はいくらでもあるのではないか、という反論も聞こえてきそうです。確かにそのとおりです。しかし、やはり正直な意見として無視し得ないことも事実なのだと思います。

シリコンバレーでベンチャー企業が数多く輩出していることと、このような考え方をあっけらかんとよしとする風潮は、やはり無関係ではないのでしょうか。スタンフォード大学の周辺で生活していると、このあたりのパロアルトのオールドダウントOWNやロスアルトスヒルズ、アサートンやメンロパークなどといったエリアにはびっくりするような豪邸があり、ポルシェがあたりまえのようにそこら中を走り回っていて、それらをあたりまえのように持っている大学の教官が、画期的なアイデアと優秀なスタッフを持って、ベンチャー企業を立ち上げ、一財産つくったのちにまた大学に復帰し(というかそもそも辞めてない)、のびのびと成果をあげつづけるという習慣。よくありそうな「お金など二の次。世の中のためになればよい」とか「研究者は貧乏に追い込まれているほうが頭をよく使う」といったお題目が実は、ただの負け犬のセリフなのではないかと疑問に思うこともあるのです。

さて、そうはいつでも、そういう人ばかりではもちろんないのが、アメリカの懐の深いところ。そういった意味では、もう一方の対極の姿として、かの有

名なDonald Knuth先生をあげておきます。先日、たまたまKnuth先生と同じ教会に通っている私の友人の奥様が妊娠なされ、こちらの風習に従いBaby Showerという催しがKnuth先生のお宅で行われました。スタンフォード大学の山側にある教官専用のエリアに小さめながら趣味のよい建築のお宅。お庭で行われたゲームは、参加者を全員一列にランダムに並べて、2種類の方法で名前順のソートを行わせ、「ほら、こっちのやりかたのほうがはやいだろ?」とみなに納得させるという、世界でもKnuth先生のおうち以外ではあり得ないもの。計算機科学の研究者としては一生の思い出ですが、そんな先生は、友人が聞いたところいわく「弟子たちのほうがはるかに金持ちなんだ」そうです。今にいたるも新しいアルゴリズムを考えたりするのがお好きなKnuth先生の最近のサバティカルでの成果はキリスト教聖書の研究の本。のんびりと好きな音楽(ご存知の方も多と思いますが、Knuth先生はパイプオルガンの名手)を楽しみながら本当にゆったりとすごしていらっしゃる様子です。

以上、とりとめもなく書いてまいりましたが、日本でも単純にアメリカの真似をすればよいのかどうか、ということに疑問がないわけではないし、そもそも、そうやって突っ走ってきたアメリカのベンチャー企業風土もGEやIBMといった伝統的ながら改革に成功している大企業が最高収益をあげるようになり、曲がり角を迎えているのも事実です。

また、Katz先生も仰ってましたが「UCBやスタンフォードが本当に優秀であると認められるようになるまでは100年になんなんとする努力がある」ということもあるでしょう。

ですが、優秀な研究機関を作りたい、あるいは、今、現在、責任を持っている機関を特に世界的なレベルで優秀なものにしたい、と願っていらっしゃる方は読者の方にも多いかと存じます。特にそのような方々に少しでも本稿がご参考になれば幸いです。

(平成14年3月11日受付)

